

「取り掛かりのはやさ」を表わす表現

—「急に」を中心に—

木川行央

I 「取り掛かりのはやさ」を表す語

仁田1983は、「動きは、その前後に動きのない静止状態を有する。したがって、総ての動きは、動き開始前の静止状態から動きへと移行・起動の段階を有する。〈取り掛かりの早さ〉は、この移行・起動の時間的な早さを問題にしたものであり、「急に、不意に、にわかに、いきなり、突然」等がこれを表し、「たちまち、じきに、ただちに、すぐに」等も「この〈取り掛かりの早さ〉に関係があるだろう」としている。このように、移行・起動の段階を有するのは、動作だけではなく、変化も同様である。

これら、動作や変化への移行・起動のはやさを表す語は数多いが、本稿では、「急に」を中心として、その用法を見ていく。なお、ここで取り上げる語には、副詞的な用法のほかに、名詞的な用法や述語としての用法もあるが、今回は触れない。

II 「急に」と「すぐに」

中道1991は、「すぐに」を「前提を含む例」としてその特徴を次のように述べている。

「すぐに」は、あることが起こり、それから間を置かず他のことが起こることを表す。つまり、先行することがらが存在することが前提となって用いられる語である。

そして、この「前提」には、実際にあることがらが起こる場合のほかに「発話の時点」もこれに当たるとしている。この前提を、ここでは、新しい動き・変化が始まるまでの時間をはかる基準となる時点の有無と考え、「すぐに」と「急に」を比較してみる。

1 五時になるとすぐに帰り仕度を始めた。

2 五時になると急に帰り仕度を始めた。

1と2を比較してみると、1は「五時」という時刻になった時点から、「帰り仕度を始める」までの時間の短さを言うのに対し、2の「五時」という時刻は「帰り仕度を始める」までの時間をはかる基準点とはならず、時間の流れの中の一点であり、たまたまその時刻に「帰り仕度を始める」という動作を起こしたと言うことのみを表すという違いが考えられる。ある動作や変化の起こるまでの時間の基準となると言うことは、その基準となる事態が次の動作や変化の原因と解釈されることも多い。たとえば1の場合、五時になったから帰り仕度を始めるのである（たとえば退社時間である、など「帰り仕度を始める」という動作を起こす原因が「五時になる」で示される）。

3 太郎は部長に呼ばれるとすぐ部長室に向かった。

4 太郎は部長に呼ばれると急に部長室に向かった。

「部長に呼ばれる」という時点は、「5時」のように純粹に時間の流れの中の一点を指すわけではない。したがって「呼ばれる」ことと呼んだ部長のいると解釈される「部長室」へ「向かう」ことの間には何らかの関係を読み、それを基準の時点とするという解釈がなされる。一方「急に」は、基準となる時点が考えられないので不自然になるのであろう（「部長室」ではなく、「社長室」であれば、「部長に呼ばれる」ことと「社長室」の間に関係が認めにくくなり、「部長に呼ばれる」ことが基準となる時点とはならなくなる。そこで、ある種逆接的な意味となり、「急に」の許容度は増すであろう）。ただし、基準となる時点で生じた事態が常に原因になるとは限らない。原因と解釈されるのは、前に起こった事態と次に起こる事態の間に密接な関係があると言う解釈される場合である。

5 立ちながら紅茶を一杯啜って、タオルで一寸口髭^{こす}を摩って、それを、其所に放り出すと、すぐ客間へ出て、「やあ兄さん」と挨拶した。（それから）

5の場合、「其所に放り出」した時点から、「客間へ出て」「挨拶」するまでの時間を問題にしている。この文で、「急に」を用いると、「其所に放り出す」までの一連の動作と、「客間へ出て」「挨拶」するという動作が、別のまとまりとして、すなわち断絶したものととして解釈される。

また、実際の会話の場面では次のように表現されない「今」つまり発話の時点が基準の時点となる。

6 すぐに追いかければ、捕まえられる。

7*急に追いかければ、捕まえられる。

また、「すぐに」と「急に」の違いとして、前者が話し手の動作にも用いられるのに対し、後者は話し手の動作に用いるときには制限があるという点がある。これは、ある動作を行う者にはその動作を行おうと思った瞬間があるはずであり、話し手にとってはその瞬間は当然認識され、それが基準の時点となるからである。

8 私は声をかけられるとすぐ振り向いた。

9? 私は声をかけられると急に振り向いた。

10 太郎は急に立ち止まった。

11? 私は急に立ち止まった。

9や11は客観的な表現としては用いられる場合があるかもしれないが、通常の話し言葉などではやや不自然に感じられる。

また、同じ理由で、話し手が主体になる場合でも、コントロールできない変化については「急に」を用いることができる。

12 急に腹が痛くなった。

13 はだして、お寝巻のままの、取乱した自分の姿が急にはずかしくなり、つくづく落ちぶれたと思った。（斜陽）

これらの特徴は、「すぐに」が意志に用いられるのに対し、「急に」が用いられないと

いう現象としても現れる。

14 すぐに始めよう。

15? 急に始めよう。

また、命令の場合、「すぐに」はその命令した時点あるいは何らかの基準となる時点からの時間の短さを指定する意味で用いられるが、「急に」は、命令を受けてそれを行おうとする時点が、基準の時点となるので不適切であると言うことになる。ただし、その動作を受ける側の視点で言う場合にはありうるかもしれない。

16 (合図があれば) すぐに始めろ。

17? (合図があれば) 急に始めろ。

禁止も一種の命令と言えるが、この場合、話し手がその禁止という命令をした時点からの短さを言う場合には「すぐに」が、予期していないことをするな、と言う意味の場合には、「急に」が用いられる。

18 すぐに(は)来るな

19 急に(は)来るな

さらに、動作や変化のどの時点の問題にするかと言う点も、「すぐに」と「急に」では異なる。この点は、どのような動詞を修飾するかの違いに現れる。「すぐに」も「急に」も状態動詞を修飾する事はない。したがって、問題になるのは動作動詞と変化動詞である。しかし動作動詞の場合でも、たとえば、「すぐに」を用いた20は自然であるが、「急に」を用いた21は不自然である。

20 太郎はすぐにその本を読んだ。

21? 太郎は急にその本を読んだ。

20の場合、基準となる時点から「その本」を読みはじめた、あるいは読んでしまった時点までの時間が短いということを表す(ただし、読んでいる間の時間の短さを言うのではない。「すぐに読んでしまった」というのは、読んでいる間の時間の短さを意味する場合もあるが、基本的には読み始めあるいは基準となる時点から読み終わりの時点までの短さを言っており、結果的に動作に要する時間の短さを表すこともあるということである。「速く読んだ」や「急いで読んだ」と比較してみるとその違いがわかろう)。それに対し、「急に」は22のように、その動作を開始する時間を問題にする。

22 太郎は急にその本を読みはじめた。

これは、その動詞が瞬間的なものか、継続的なものかによる違いと解釈される。同じ動作動詞でも次のような場合は、「～はじめた」や「～だす」など開始時点である事を明示しなくとも「急に」が用いられる。

23 太郎は急に花子の手を握った。

したがって、同じ語でも瞬間的な場合には「急に」が用いられるが、継続的な場合には「～はじめた」等がつかないと不自然になる。

24 太郎は急に花子をじろっと見た。

25 *太郎は急に花子をじろじろ見た。

26 太郎は急に花子をじろじろ見はじめた。

ただし、瞬間的と言っても必ずしも厳密な意味ではない。

27 急に宅間が、「そいつは、愉快だ」と、はしゃいだ声で言った。(現代雑誌)

28 朝の挨拶をしてから、急に、「僕、おかしい奴ですか?」と真顔で聞いた。(現代雑誌)

これらの場合、ことばが発せられた瞬間を問題にしているのではないが、ある短いことばが話される時間も、瞬間に準じるものとして捉えられている。したがって、上の例と同じ動詞でも、継続的であると考えられる場合には「急に」は不自然である。これは、「見る」の場合と同じである。

29? 太郎は花子から急に映画のストーリーを長々と聞いた。

変化動詞の場合も、その変化が瞬間的に捉えられる場合と、継続的に捉えられる場合がある。しかし、変化動詞の場合には継続的な過程をとるものでも「急に」を用いることができる。

30 ひと雨降ったら花のつぼみがすぐにふくらんだ。

31 ひと雨降ったら花のつぼみが急にふくらんだ。(國廣1982の用例)

この場合も、「すぐに」が用いられると、「ひと雨降った」と「花のつぼみがふくらむ」ことが結び付けられている。それに対し「急に」が用いられた場合には因果関係のようなものは、特に感じられない。

さて、以上で見てきたように、「急に」は話し手の動作や動詞について「すぐに」と比べると制限がある。しかしこれらの制限があるはずであるが、文としてはさほど不自然ではない、あるいは許容度が増す場合がある。このような場合としては、従属節に含まれる場合があるようである。

まず、話し手の動作についてみてみよう。

32 私が急に振り向くと、彼は驚いた。

33 私が突飛なことを急に尋ねても、彼女はいつもの的確に答えてくれる。

32や33の場合には、取り掛かりが「急」だ思う人間の存在で解釈できるかも知れない。そして、9や11が用いられる場合、すなわち客観的な表現というもの聞き手や読み手が「急」だと思ふ立場になる場合と考えることも出来る。しかし、次の例のように「急」だと思ふ人間が話し手自身以外考えられない場合もある。

34 椅子にずっと坐っていたあと、急に立つと、めまいがした。

また、「急に」が継続的な過程を含む動作を表す動詞を修飾する場合でも、従属節中であると許容度が高くなることがある。

35 *予備知識もないのにこんな難しい本を急に読んだ。

36 予備知識もないのにこんな難しい本を急に読んでも、理解できないだろう。

37 *急に走った。

38 これまで運動していなかったのに急に走ったので疲れた。

このように、どの位置で用いられるかによる違いもあるが、「すぐに」と「急に」の基本的な違いは、基準となる時点が存在するか否かという点であると考えられる。そして、基準となる時点がないと言うことは、それを見ているものにとっては「思いがけない」ととられ、それ以前の状態との断絶が感じられることになる。この基準となる時点の有無によって、「取り掛かりのはさや」を表す副詞を分類するとすれば、次のような語が基準となる時点からのはさやを表していると考えられる。

いちはやく おりかえし 言下 早速 至急 じき すみやか 即
そのまま たちどころに ただちに たちまち 短兵急 観面 途端
咄嗟に ……

ただし、これらの語がすべて、「すぐに」と同じ用いられ方をするわけではない。たとえば、「たちどころに、たちまち、観面、途端」などは意志や命令に用いられないなど、基本的な点でも異なる。

一方、基準となる時点のない語は次のような語である。

いきなり 出し抜けに 唐突に 突然 突如 にわかに 不意
やにわに ……

Ⅲ 「急に」と「いきなり」

Ⅱで、基準となる時点の想定されない語として上げた語の中から、「いきなり」を取り上げてみる。

「いきなり」が、基準となる時点からの短さを表すのではないことは、次のような例からも言えよう。

39 が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持っている大胆と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢いよく飛び上がった。(戯作三昧)

39の場合、「いきなり」を「急に」と置き換えても、「膝の上へ勢いよく飛び上がったこと自体が思いがけなく行われた動作であることを示すが、「すぐに」と置き換えると、「襖を開け」た時点からの時間を問題にする表現となる。また、次の例も参照。

40 5時になるといきなり掃り仕度を始めた。

41? 部長に呼ばれるといきなり部長室に向かった。

42 太郎は部長に呼ばれるといきなり社長室に向かった。

しかし、「いきなり」は「急に」と異なり、話し手の動作について用いられる。

43 寝巻姿で、コトコト松葉杖をついて出て来た奥さんに、いきなり抱きついてキスして、泣く真似をしました。(人間失格)

44 河童はこの牡牛を見ると、何か悲鳴を挙げながら、一きわ高い熊笹の中へもんどりを打つように飛び込みました。僕は、――僕も「しめた」と思いましたから、いきなりあおのあとへ追いつきました。（河童）

これは、後でも見るように「いきなり」が、あるはずであると想定される過程を経ないことを表すからであると考えられる。あるはずである過程を経ないと言うことは話し手が意識的に行うことができる。したがって、意志や命令、禁止に「いきなり」が用いられることもある。これは、あるはずの過程を経ずに行おうと考えたり、そういうふうに行えあるいは行うなど命令するわけであるが、特に意志や命令の場合はやや特殊な場面と言えるかも知れない。

45 （余計なことはせずに）いきなり始めよう。

46 いきなり始めろ

47 いきなり始めるな

「急に」の場合は、あるはずの過程を経ないことを表すのではなく、動作をする者の意向とは関係なく、その動作を受けたり変化を知覚するものにとって、その事態が思いがけない事象を表すため、（前述のように動作を受けたり変化を知覚する側の立場にたつと言う場合を除けば）命令には用いにくい。

ところで、「急に」は話し手が主体になる場合で、コントロールできない変化については用いられるとしたが、「いきなり」がこのような例に用いられることは少ないようである。

48 その写真を見て私は急に昔のことを思い出した。

49? その写真を見て私はいきなり昔のことを思い出した。

このように、コントロールできない事態に用いられないのは、主体が話し手以外の場合でも同じである。また、変化を表す場合についても「いきなり」は落ちつかない場合が多い。

50 父の病状が急に悪化した。

51? 父の病状がいきなり悪化した。

52 雨が急に降り出した。

53? 雨がいきなり降り出した。

53が用いられとすれば、降り出し方が単に思いがけなかっただけではなく、話し手のその事態に対する驚きの大きさを、あるいはそれに伴う被害者意識を表現する場合であろう。54もそのような例と考えられる。

54 昨日まで何ともなかったのに、裏の壁がいきなり崩れて、畑が全部埋まってしまった。（中道1991の用例）

一方次のような例では、「いきなり」を「急に」に置き換えると不自然な文になる。

55 委員会にはからないで、いきなり学長に申し入れた。（藤原他編1985の用例）

この文は、時間的な点を問題にしたものではなく、あるべき委員会の協議を経なかった、ということの意味している。これに類する例としては、56のような例があるが、ほぼ同じ状況を表すと考えられる、57では「急に」が用いられている。

56 試験にパスして、いきなり部隊副官兼人事課長に抜擢されるなんて、めぐまれすぎてるわ。(現代雑誌)

57 何故坊さんが急に大将になれるんだとか、大抵説明の出来ない質問のみであった。(それから)

この場合、途中の官位などを経ていない事を出していると考えられ、その点では「いきなり」の方が自然であろうと考えられるが、時間的な速さを強調する場合には「急に」が用いられる場合もあると言う事であろうか。

さらに、次の文も、「急に」を用いると意味が変わる。

58 下書きもせずに、いきなり消書用の紙に書き始めた。(國廣編1982の用例)

59 下書きもせずに、急に消書用の紙に書き始めた。

59が、動作への取り掛かりが早いことを表すのに対し、58は下書きなどの準備がないことに着目したものと解釈される。これは、「いきなり」が空間的な表現に用いられる場合も同様である。

60 靴を脱ぐ土間もなくいきなり板張りの部屋である。(國廣編1982の用例)

61 目の前にいきなり一面の雪野原が開けた。(藤原他編1985の用例)

60の場合は、「急に」を用いる事が出来ない。それに対し61の場合には「急に」を用いる事も出来よう。これは、修飾される語の違いと考えられる。

また、IIで、「急に」は継続的な過程をとることを表す動詞を(主節では)修飾しないとしたが、「いきなり」はこのような動詞を修飾する場合がある。

62 予備知識もなく、いきなり専門書を読んだ。

63? 予備知識もなく、急に専門書を読んだ。

64 彼は習作も書かず、いきなり長編小説を書いた。

65? 彼は習作も書かず、急に長編小説を書いた。

ただし、この場合も「あるはずの過程」が考えられるときに限られる。したがって、単に「太郎はいきなり本を読んだ」という文は、文脈による補助がなければ不自然な文となる。

このように、「いきなり」は基準となる時点からの時間の短さを言うのではないと言う点では「急に」と共通しているが、話し手の動作を表す文にも用いられたり、継続的な過程を表す動詞を修飾したりする点が異なる。これは、「いきなり」が「あるはずの過程を経ないである事態が成立する」ことを表すためであると考えられる。そして、「あるはずの過程を経」ないことが、移行・起動のはやきに通じることになる。

IV 「急に」と「突然」

「突然」も、「急に」と同様、基準となる時点からの短さを言わない語である。

66 5時になると突然帰り仕度を始めた。

67? 太郎は部長に呼ばれると突然部長室に向かった。

この他、意志や命令には用いられない点、話し手の動作については通常用いられない点、継続の過程を含む動作動詞を修飾しない点なども、「急に」と「突然」で共通する点である。

ところで、國廣1982では、「急に」と「突然」の違いとして次の例をあげ、このとき「突然」は用いられないとしている。。

68 ひと雨降ったら花のつぼみがキュウニふくらんだ。(=31)

このように「過程」を含む場合、「急に」は用いることができるのに対し、「突然」は用いられないとし、「突然」(および、「いきなり・だしぬけに・不意に」)は<ある事態が瞬間的に成立すること>を表し、さらに「キュウニは<ある事態の生じ方が予想外であり、その事態と前の状態との格差が通常より大きい>」ことを表すのに対し、「トツゼン」は<ある事態の生じ方が瞬間的であり、その事態と前の事態との断絶が際立っている>」ことを表すとしている。

68の例で、「突然」が用いられないかどうかの判定は微妙であるが、もし「突然」が用いられるとしても、「急に」と比べると、かなり瞬間的な変化と感じられる。また、次のような例でも、「突然」より「急に」の方が適当であろう。

69 産業における設備投資が急に進むと、他方では工場用地の埋立て(中略)など、政府の仕事である公共的な投資の拡充が必要になってくるからである。(高校教科書 政治・経済)

ただし、過程を含むと考えられる変化で、「突然」が用いられないわけではない。

70 微光星が突然光度を増し、数日間で数万倍の極大光度に達したのち、数か月かけてゆるやかに減光していく天体を新星という。(高校教科書 地学)

前述のように、「急に」が、ある事態の成立に要する時間が短い事を表すのは、変化動詞の場合だけであり、「突然」も継続的な過程を含む動作動詞の場合には「急に」と同様用いる事はできない。しかし、「急に」が従属節中では不自然でなくなるのとは異なり、「突然」は従属節中でも不自然であるようである。

71? 太郎は多量の用例を急に集めた。

72? 太郎は多量の用例を突然集めた。

73 太郎がそんな多量の用例を急に集めるのは無理だ。

74? 太郎がそんな多量の用例を突然集めるのは無理だ。

75 これまで運動していなかったのに急に長距離走ったので、疲れた。

76? これまで運動していなかったのに突然長距離走ったので、疲れた。

また、「急に」が話し手の動作については、基本的に用いられないのと同様、「突然」も用いられない。また、継続的な過程を含む動作動詞の場合と同様、「急に」は従属節中であれば用いられるが、「突然」はやや不自然である。

77 これまで運動していなかったのに急に長距離走ったので、疲れた。

78? これまで運動していなかったのに突然長距離走ったので、疲れた。

ところで、次のような場合は「急に」より「突然」の方が落ちつく。

79? 彼からの手紙が急に届いた。

彼からの手紙が突然届いた。

80 1923（大正12）年9月1日、突然関東地方を襲った大地震は日本の心臓部にあたる東京や横浜に大きな損害を与えたので、これが各方面に及ぼした影響は大きかった。

（高校教科書 日本史）

81 三四郎はこの花を池の中へ投げ込んだ。花は浮いている。すると突然向うで自分の名を呼んだものがある。（三四郎）

これらは、それまで認知していなかったものの動作や変化とする事ができよう。「急に」にこれにあたる用法がないわけではない。

82 二人が話していると、向うの方で、急に高い声がした。（三四郎）

したがって、これを「急に」と「突然」の明かな違いとしてあげることにはできないが、傾向としてはいえよう。これらも、「突然」が、より瞬間的であることの現れと見ることもできる。

さらに、「急に」と「突然」は時間的な短さを言う場合が多いが、空間的なことをいう場合にも用いられる。この場合も、時間的な場合に「突然」の方が瞬間的であるのと並行して、「突然」の方が、状態の変化が大きいように感じられる。

83 その男の肩の上から場内を覗いて見ると、中は急に広がっている。（三四郎）

84 坂を下りきって電車通りと交叉すると、突然そこから街になる。（陰気な愉しみ）

V 最後に

本稿では、取り掛かりのはやさを表す表現のうち、「急に」を中心にその基本的な用法を見てきた。しかし、この類に含まれる語は数多い。これら他の語と比較していくことによって、より綿密な記述がなされるであろう。ただし、例文の判定については微妙な点が多く、実際の用例についてみても、個人差がありそうな点もある。これらの点をどのように処理して行くかの問題は残る。また、文体的な問題や話し手の心的態度など、記述の方法に問題があり、かつその問題を避けることは難しい。

さらに、これらに隣接する語群、たとえば、「はやい」「すばやい」「急速」「いそいで」などとの関係も問題になってこよう。たとえば、「今」を基準としたとき、次のように「すぐに」と「はやく」が似た文脈で用いられる場合がある。

85 すぐに起きなさい。

86 はやく起きなさい。

いずれも、今から起きるまでの時間について言っていると考えられる。また、過程を含む変化の場合、その時間の短さについて言うとき「急に」との関係が問題になる。

87 溶液中では急に成長する

88 溶液中でははやく成長する

このような場合を含め全体的に記述する必要があるが、これらについては今後の課題としたい。

<用例出典>

『三四郎』（夏目漱石 近代作家用語研究会・教育技術研究所編 1984 『近代作家用語索引 夏目漱石』教育社）

『それから』（夏目漱石 同上）

『河童』（芥川龍之介 近代作家用語研究会・教育技術研究所編 1985 『近代作家用語索引 芥川龍之介』教育社）

『戯作三昧』（芥川龍之介 同上）

『人間失格』（太宰治 近代作家用語研究会・教育技術研究所編 1987 『近代作家用語索引 太宰治』教育社）

『陰気な愉しみ』（安岡章太郎 梅崎春生・島尾敏雄・吉行淳之介・安岡章太郎 1987 『昭和文学全集』第20巻 小学館）

『高校教科書 政治経済・地学・日本史』（国立国語研究所 1985 『高校教科書 文脈付き用語索引』日本マイクロ写真）

『現代雑誌』（国立国語研究所 1987 『現代雑誌九十種の用語用字 五十音順語彙表・採集カード』東京都板橋福祉工場）

<参考文献>

國廣哲彌編 1982 『ことばの意味 3』平凡社

徳川宗賢・宮島達夫編 1972 『類義語辞典』東京堂出版

中道真木男 1991 「副詞の用法分類－基準とその実例－」『日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法』大蔵省印刷局

仁田義雄 1983 「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10

飛田良文・浅田秀子 1994 『現代副詞用法辞典』東京堂出版

藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭編 1985 『表現類語辞典』東京堂出版

森田良行 1977 『基礎日本語 1』角川書店

（きがわ ゆきお・姫路獨協大学）